

令和7年度 学校評価報告書
小樽市立奥沢小学校
校長 佐藤 裕司

【評価】 数値目標に対する達成度を、以下の基準で評価することを基本とする。

A:100%以上 / B:80%以上100%未満 / C:80%未満

※ 評価する際には、学校関係者と密接な連携をとり、単に数値の達成率を見るだけでなく、目標達成に向けたプロセスや、児童生徒の成長の度合い、具体的な取組の内容などを総合的に評価すること。

1 本年度の重点目標

「笑顔・学び・夢」いっぱい 心あったか奥沢の子

2 自己評価結果・学校関係者評価の概要と今後の改善方策

小樽市教育推進計画の目標	施策項目	数値目標	自己評価		学校関係者
			評価	取組状況・達成状況	
1 未来を創る力の育成	確かな学力の育成	「国語・算数がわかる」と回答する児童の肯定的割合を90%以上にする。	B	国語は専科加配を活用して国語教諭が4～6年生で専門的に教えている。また、今年度も校内研修の教科について、算数を研究教科として全職員で取り組んでおり、公開研究会も通常学級で全クラスの授業を公開した。算数の5年生では児童の学力差が見られることから、習熟度別授業を可能な範囲で取り組んでいる。学校評価児童アンケートで「算数・国語がわかる」と答えた児童は87%であった。(国語:89.9%、算数:84%)	○
	特別支援教育の充実	定期的な校内支援委員会や児童の実態交流等を毎月(年12回以上)行う。	A	毎月の定例の職員会議の際に、生徒指導交流として支援が必要な児童等を担任が全職員に情報を共有するなどして周知をはかった。また、適時、校内支援委員会(各月1回)を開催し、各学級の状況を共有した上で、対応が必要な児童の支援の方法について協議し、特別支援コーディネーターが支援員の配置の調整や支援のあり方の見直しを図った。また、支援が必要な学級については、複数の教職員が入り、児童の支援をする取り組みも行った。	◎
	国際理解教育の充実	「外国語(活動)が好き」と回答する児童の肯定的割合を80%以上にする。	B	3年生以上の外国の授業でALT(外国語指導助手)が授業を持っており、潮見台中学校の加配された英語科の専科の教職員が週2回来校し、5年生以上の児童に対して専門的な英語の授業を教えてくれている。しかし、「外国語(活動)が好き」という肯定的な割合が70.1%という結果である。英語の関心を高めるため中学校を会場とした英検の受験も6年生を中心に挑戦し、市教委主催の年2回のイングリッシュキャンプにも複数の児童が参加するなど外国語に関する関心は高まりつつ	○
	理数教育の充実	「算数が好き」と回答する児童の肯定的割合を80%以上にする。	B	本校校内研修の算数の研究の視点において、児童に主体的に学び、確かな学力を育むために、「5つの安心」を掲げている。授業において、児童に授業をわかりやすく進めるために単元計画や1時間の流れを可視化している。また、互いに力を合わせて課題を解決するためにわかった児童が困っている児童にミニ先生としてお互いに教え合う風土を作っている。しかし、「算数が好き」という学校評価児童アンケートの肯定的意見が69.6%となっており、まだ課題として残る。	○
	情報教育の充実	「インターネット等の利用に関するルールを決めている」と回答する保護者の割合を85%以上にする。	A	本年度の学校評価保護者アンケートでは、「家庭でルールを決めている」と肯定的な意見が83.4%とわずかに目標には届かなかったが、目標値に迫ることができた。今後は、「小樽スマートセブン」のさらなる浸透や、年度当初の保護者会等で保護者に家庭でのルール作りをお願いするとともに、児童にも「学習・生活習慣カード」等を使用し、自己の利用時間を可視し、学習等との時間のバランスを考えさせる機会をさらに設ける。	◎
	キャリア教育の充実	「将来の夢や目標をもっている」と回答する児童の肯定的割合を85%以上にする。	B	キャリアパスポートにより自分を見つめ自らの成長と今後どのようになりたいのかを考え、高学年に進むにしたがって、身近な職業調べから自分になりたい職業を進路にあわせて考えられるように努めている。本年度の学校評価児童アンケートでは「将来の夢や目標を持っている」と肯定的な回答が82.9%と目標値に達していない。今後は、低学年から自分を見つめ将来の姿を思い描けるようにキャリア教育等の推進を進めていく必要がある。	○
改善方策	児童が「算数がわかり好き」になるためには、授業が楽しく練習問題が解けるなど、自力でできる達成感を味わうことが必要だと考える。指導者1人で多くの児童を見取るのは限界があることから、算数では、5年生で実施している習熟度別授業を他学年でも取り入れる必要がある。また、インターネットの利用に関するルールについても年度当初から保護者に投げかけて児童と話す機会を持ってもらうようにしたい。さらに、授業がわかれば将来どういったことをやりたいとする向上心も芽生えると考え、校内研修を通して授業改善を更に進めていく。				
学校関係者評価委員による意見	・学力の育成には職員の数にも限りがあるので、異学年で教えるなどを行えば教える側は自らの学習の確認も行えるのではないかと。・職員や保護者アンケートから昨年より取組が進んでいる状況であることからもう少し高い評価でも良いのではないかと。TTや習熟度別授業を実施するためには教職員数の増加が必要になると思われるので、子供たち一人一人の達成感や子供のやる気を大切にしたい授業を今後も進めてほしい。・市内のどの学校に行っても同じレベルの授業を受けられるようになってほしいです。小樽市全体の子供たちのために				

2	豊かな心の育成	道徳教育の充実	数値目標:「自分にはよいところがある」と回答する自己肯定感の割合を80%以上とする。	B	教職員が児童に対してカウンセリングマインドを持って接し、授業においても生徒指導の機能(自己存在感・共感的理解・自己決定)を生かしながら行うように心掛けさせている。まず、児童の良さを認めるとともに、いけないことは毅然として説諭することで、児童は自分の良さを感じるとともに何が悪かったのかしっかりと理解し、次第に繰り返さないようになってきている。そのようなメリハリのある児童との接し方から、児童アンケートでは「自分には良いところがある」とする自己肯定感や自己有用感の数値が77.5%と目標に達しなかったが徐々に成果が現れ始めている。	○
		ふるさと教育の充実	外部講師や地域の施設等を活用したふるさと小樽に関する学習を全学年3回以上行う。	A	6月に小樽トラック協会と小樽警察署の方々による交通安全教室、7月に潮踊り講習会において藤間先生をお呼びして潮練りこみ踊り講習会を開催し、希望者を募りその後中学校と連携して潮練りこみに梯団を組織し参加した。また、各学年毎で総合的な学習の時間や社会科の時間で地域の工場や企業、または公共施設を訪れ、そこで働いている人へのインタビューや製作体験等を通して小樽の魅力を学習する機会をいただき、まとめたものを学年発表や学習発表会の場で発表することができた。	◎
		読書活動の推進	読書を全くしない児童の割合を15%以下にする。	B	各学年で朝活動の取り組みとして「朝読書」に取り組んでいる学級が多くみられる。また、中休みや昼休みに図書室で図書の貸し出しを受ける児童が日に日に増加している傾向がみられる。今年度の「読書をまったくしない児童」については、今年度の学校評価児童アンケートでは「ほとんど読んでいない」と回答した児童が23%という結果となった。読書週間とは少しでも所定の時間を決めて毎日活字に触れることで、少しずつ身に付くものであると考えるので、この活動をはじめ、授業や家庭における音読にもさらに力をいれていく。	○
		体験活動の推進	ボランティア活動や体験活動を全学年2回以上行う。	A	全学年においてトラック協会による「交通安全教室」を実施し、トラックの内輪差による自転車の危険性について実体験を見ることでその認識を改めて理解した。また、全校に投げかけて地域の方々と一緒にゴミ拾い体験や花壇の整備等を保護者も巻き込み実施した。また、冬には「赤い羽根募金」運動に児童会が取り組み、歳末助け合い運動を本校でも展開した。	◎
		コミュニケーション能力の育成	「対話を意識した授業づくりをしている」と回答する教員の肯定的割合を95%以上にする。	A	本年度の学校評価教職員アンケートでは、「対話を意識した授業づくりをしている」との肯定的意見が後期は100%の数値となっていた。本校では校内研修で児童の良さや主体性を生かした授業づくりを行っており、本年度は研究の3つの視点を柱に通常学級の全クラスで公開研究会で授業をおこなった。これらを通して児童との対話を中心にした授業づくりが各教職員に研修の成果として十分浸透している証である。この研修は全4年次計画の2年次目であり、来年度も教職員の授業への取り組みの重点となります高まっていくことが期待できる。	◎
		いじめの防止や不登校児童生徒の支援の充実	「学校が楽しい」と回答する児童の肯定的割合を90%以上にする。	A	4月実施した全国学力学習状況調査で「学校に行くのが楽しい」とする肯定的な意見をもつ6年生が95.6%と高い数値にあった。また、12月実施の児童学校評価の同項目では89.8%という数値となった。学年によって数値に差はあるが肯定的な意見が多かったが目標数値にはわずかに届かなかった。各学年の年度当初の学級経営案を振り返り改善策を考えるとともに、学校に通いたくなる魅力的な授業づくりや児童会活動になるように引き続き努めていく。また、肯定的な意見が低かった児童に対して、担任が状況を分析し、教育相談等で改善点を見つけ全職員と交流する。	◎
改善方策	図書室の利用率は確かに向上したが、それが読書率につながっているかといえば課題が残る。学校図書館ボランティアや図書司書教諭と連携して、児童が図書室に通い読みたくなる工夫をするとともに、朝読書等の徹底を図っていく必要がある。また、児童の自己肯定感を高めるための生徒指導の機能を生かした言葉がけ等を継続する必要がある。さらに、楽しい学校作りのために授業改善や児童が考える学校行事にシフトできる場所はしていき、学校行事が自分事と感じられるように工夫していく。					
学校関係者評価委員による意見	・自己肯定感はこの時代に必要な気持ちなので成果が出てきてうれしく思います。図書は子供たちの本離れが進んでいるので、活字に触れてもらうが第1目標ならば、デジタルでクロームブックなどで行えるものがあると少しでも興味を持つかも。・学校図書ボランティアをはじめ多くの取組が行われているので、今後とも継続するようにしていただきたいです。・横のつながりを大切にして子供たちの為に見やすい学校にしたい。					

小樽市教育推進計画の目標	施策項目	数値目標	自己評価		学校関係者	
			評価	取組状況・達成状況		
3	健やかな体の育成	体力・運動能力の向上	「体育が楽しい」と回答する児童の肯定的割合を95%以上にする。	A	昼休みに体育館や外遊びで元気に体を動かす児童が多い。また、体育の授業でもグラウンドや体育館でも意欲的に学習する姿が見られる。体育では個の運動の技能を高めるだけでなく、自分の目標を設定しそれに向けて努力することや級友と交流を通して、相談・指摘するなどしながら互いに運動を楽しみ技能を高め合う姿が見られる。学校評価児童アンケートでは「体育が楽しい」と回答する児童が95.7%と高い数値となっている。また、4月におこなった全国運動能力運動習慣調査で本校の課題になった持久力について、職員会議でそれを高めるための手立てを担当係が提案し、各学年がそれに向けて取り組む意欲的な姿が見られる。	◎
		食育の推進	朝食を食べてこない児童の割合を5%以下にする。	A	潮見台小学校の栄養教諭による食育の出前授業を行い、食の大切さや栄養素の学習を行った。また、保健だよりを通して、朝ごはんの大切さを特集記事として掲載する等、朝ごはんの必要性を啓発してきた。その結果から、朝ごはんを食べてこない児童の割合は4%となっている。更に改善を図るため保護者の出勤等の関係で一人で起き、学校に登校する児童もいることから、そういった児童の保護者への朝ご飯の摂取のご協力をお願いする等の働きかけが必要である。	◎
		健康教育の充実	「早寝・早起き・朝ごはんなど、基本的な生活習慣が身に付いている」と回答する保護者の肯定的割合を85%以上にする。	B	今年度の学校評価保護者アンケートで基本的な生活習慣の定着は「ついている」と肯定的割合の回答は79.6%という結果となり、目標に届かなかった。保護者の意識の定着のために、養護教諭による学校だよりでの情報提供や年2度の保護者との教育面談による担任からの啓発を行ったが成果としては物足りないものである。特に高学年になると夜型への生活に変化する傾向がみられることから、低学年時からその習慣の大切さをあらゆる機会を通して保護者や児童に啓発していく必要がある。	○
改善方策	児童が楽しく充実した学校生活を送るためには「早寝・早起き・朝ごはん」など基本的な生活習慣が重要なものとなる。学校でも外部講師を招聘し、児童を対象に様々な教室を行うとともに、保護者にも様々な機会を通して呼びかけ、協力を仰いでいきたいと考える。また、高学年では夜型の生活に変わり朝食を抜かすことが多いため、生活・学習カード等を利用して実態を把握し、個別に生活習慣の改善をするように教育相談等で伝えるように努力していく。					
学校関係者評価委員による意見	・心と体の成長には、家庭の連携が欠かせないので、今まで通り発信していくしかないと思います。・生活習慣の改善は、保護者のライフスタイルと連動している面が強いので、今後とも子供と共に保護者(親)への啓発にPTAも巻き込んで取り組んでいただきたい。・自分たち大人も一緒に早寝早起き朝ご飯に努力しないとだめですね。					
4	家庭・地域との連携・協働の推進	家庭教育支援の充実	家庭学習を全くしない児童を0%とする。	B	学年毎に宿題を出し、学習の定着を図ったが、学校評価児童アンケートでは家庭学習をまったくしない児童が3%と依然家庭学習を行わない児童がいる結果となった。宿題の未提出の児童については放課後担任が学級で残して行ったり、毎週月曜日に放課後学習会を行うなど家庭学習につながるように工夫している。また、特定された児童については個人面談等を行い、毎週の週末にはタブレットを持ち帰り、web上のスマートドリルやプリントを用意し復習に取り組ませるなど家庭学習の定着に努力してきた。今後は全職員で解決すべき共通課題として継続的な取組が必要である。	○
		学校と地域の連携・協働の推進	学校支援ボランティアの活用を25回以上にする。	A	学校支援ボランティアにおいて今年度は学校図書館に関するボランティアで34回以上の延べ74人(11月現在)の地域の方々にご協力いただくとともに、市立小樽図書館のご協力により「ブックフェスティバル」を全児童を対象に開催し、その取り組みにもご協力をいただいた。また、プール学習を安心安全に実施するために保護者をお願いし、監視員として6名の参加をいただいた。更に、子どもたちと触れ合い良い思い出作りをするPTA企画の奥沢フェスタを行い、多くの保護者とその運営をボランティアとして参加いただいた。	◎
改善方策	学習習慣が定着していない児童においては、児童には個別にアプローチし学習の仕方や学習プリントを渡し、家庭で行うように働きかける。また、保護者に協力を依頼し、声掛けをしてもらうと同時に学習環境の整備等を年2回の保護者面談等でお願ひし、家庭学習の定着を図っていく。					
学校関係者評価委員による意見	・上記に書かれている改善方策が何よりだと思います。また、放課後そういう教室を1つ開放して友達と行える環境があってもよい。・保護者の協力というか責任をもって進めないですね。そのためには教職員さんとの普段からのコミュニケーションを深める必要がありますね。					

5	学びと育ちをつなぐ学校づくりの実現	学校段階間の連携・接続の推進	向陽中学校との連携会議等年2回以上開催する。	A	管理職レベルでの連携会議を3回、係間の会議を3回以上開き、電話等で複数回連絡を取り合うことで学校間の連携・接続を行った。また、12月17・20日の小中それぞれの公開研究会には教職員が足を運び、互いの授業を見合い協議を行った。2度の後志教育局指導監訪問では、小中の校長が中学校を会場として小中一貫に関する内容で協議する時間を設け、体系的な教育課程の策定や今後の取組や活動内容を検討し合った。	◎
		教育環境の整備・充実	「端末を活用した授業や校務支援システムの活用を積極的に行っている」と回答する職員の肯定的割合を90%以上にする。	A	「端末等を使つての授業改善や校務支援システムを積極的に活用している」において、校内研修や教育DX担当教諭によるミニ研修もあり、学校評価教職員アンケートでは値が93.8%となっている。校務PCが新しくなり、職員会議のやり方や連絡方法がクラウドを使い、すぐに情報を開き出せるなどより便利になった。今後、各教職員がさらに端末の活用がスムーズになれば肯定的な割合の向上が見込める。	◎
		教職員の資質・能力の向上	全教職員が校外の研修会、研究会に年3回以上参加する。	A	夏冬の市教委主催の研修や市教研への参加、公開研究会参加等、各教職員が年3回以上研修会に参加している。奥沢地区の小中学校の各公開研修会には多くの先生方が参加し、各校の研究の視点から授業を見合い、小中一貫教育を意識した研究協議を行った。また、地域公開日等でも中学校の管理職が来校し、中学年から高学年を参観していただいた。	◎
		学校運営の改善	学校運営の改善に参画しようとする教職員の割合を90%以上にする。	A	教職員学校評価において、「学校運営の改善と参画意識」に肯定的な意見が93.8%と高い数値であった。これら今まで職員間で取り組んできた職員会議前の学校運営委員会や各分掌部会で必要に応じて協議する回数が増えたことが1つの要因だと考えられる。また、職員用のSWOT分析を行い、子どもや教職員間等の良さや改善点を自分事として教職員に考察させ改善策を上げさせ交流したことも成果があったと考える。	◎
		学校安全教育の充実	「安心・安全」に関わる外部機関との連携(避難訓練・交通安全教室・一斉下校日実施等)を年5回以上おこなう。	A	年度2度の火災・地震を想定した避難訓練や低学年を対象とした交通安全指導員からの交通安全教室、更に小樽トラック協会のご協力をいただいて全校で交通安全教室を行った。また、児童が住む地区に分かれての一斉下校集会を各学期に行い、安全に登下校する注意点や場所等を児童たちで考え、下校する一斉下校日を定めた。更に、交通安全指導員のご協力により毎日の登下校の交通安全指導:「見守り活動」を継続して取り組んでいただいている。	◎
改善方針	教育環境整備のために、小樽市の有志の教職員が集まり全市的に校務DX化が加速していく流れがある。それに乗り遅れないように校務DX担当教諭を中心に情報を共有し、より校務の効率化が進むように心がける。また、学校安全教育が緊急時にも役立つようにするために、避難訓練等で児童に1回は何も知らせずに緊張感をもって行えるように工夫をしていく必要がある。					
学校関係者評価委員による意見	・若手の先生方も増えてきたので、役割としても責任を持つところにしてみて良いのかと思います。・校務DX化が仕事の効率化や働き方改革に結びつくには時間がかかると思いますが、良い面を取り入れてほしいと思っています。地震・災害が身の回りに起きているので、防災への取組を更に進めてほしい。・幼小中の連携について、一般職員の意識や考え方をどれだけ協議しているかを教えてほしい。					
社会教育に関連する目標(目標6~8)		図書館、総合博物館、文学館、美術館等の市の施設を全学年が年2回以上利活用する。	B	1年生は市立給食センターの見学、2年生は市立図書館の利用、3年生は総合博物館や小樽運河館の利用をした。また、4年生では朝里ダムや浄水場の見学、遊覧船を使つての小樽運河と湾岸の見学、5年生ではおこばち山荘を利用した宿泊研修を行った。6年生は利用する機会に恵まれなかったが、市の特産物であるガラス工芸体験を行わせてもらい卒業制作を行うとともに、修学旅行でウポポイの資料館見学や体験活動、北小金貝塚を訪れガイドさんの解説のもと遺産を見学した。		○
改善方針	高学年になると1度は訪れたことがある小樽の教育施設が多くなるため、活用するのが難しいのが現状である。また、スクールバスの手配等で時期が合わなくなることも課題である。高学年には各教科との関連を図りながら、訪れる施設を探す必要があるとともに、早めのスクールバス等の申請をするように努める。					
学校関係者評価委員による意見	・学校でというよりは、市全体でどうしていくのか考えていくことも必要。・スクールバスを含め、現状の中で十分に活用されていると思います。 ・改善方針がはっきりしているのであれば、何か違う方法を含めて考えているのかを聞いてみたい。					